

## 目次

### 特集●あの議論はどこへいった

#### ● 特集趣旨

あの議論はどこへいった——。今回の特集では、過去において研究の蓄積があったテーマについての議論を振り返り、その現在の意義についてあらためて考えてみたい。社会科学の研究は、変化してやまない時代の要請を見つめて、実態の把握や理論的な検討を進めてきた。社会の変化と人々の関心の在処を敏感に把握し、新しい概念でその核心をとらえてきた。そうした概念を中心に複数の研究者が研究を行い、ときに白熱した議論を生み出す。労働研究の分野も例外ではない。このような研究のあり方は、その時々、社会的要請に対応した研究のすばやい蓄積をもたらしてきた。しかし他方で、論点への人々の関心が薄れると、特別な取りまとめのないまま研究が途絶え、議論が終息することにもつながる。後から振り返ると、あの議論はどこへいったかと思う。あるいは、ほとんど振り返られなくなる。しかし、使われる概念はちがっていても、そうした議論と研究の蓄積のなかには、現在の研究にとって有意義な発想や視点、理論、事実発見に満ちたものが少なくない。今につながる社会の変化をとらえた研究もある。

そこで、本特集では、過去に研究の蓄積があった議論のいくつかについて、中心的な概念を取り上げ、議論を整理し、現在の意義について自由に論じて頂いた。内容を踏まえて、1. 雇用・就業と労働市場、2. 技術・技能と労働生活、3. 賃金・福利厚生と働き方、4. コーポレートガバナンスと労使関係、の4つの領域に分けて掲載している。取り上げた概念はもとより網羅的ではない。他の議論も含めて、あの議論はどこへいったと、様々な研究の蓄積を振り返るきっかけとなることを期待したい。